

2020. 9. 13. 聖霊降臨節第16主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書13章10-21節

『束縛からの解放』

福音書の中には同じような話がたびたび出てくるということがあります。今朝の聖書箇所などその典型です。どうしてこう何度も出てくるんだろう、と素朴に思う人は少なくないでしょう。実際に何度もあったから、繰り返し書かれているのではないか、というのがまず最初に思うことです。しかし何度もあったとしても、一度二度と書けば、ふつうは読者に承知されるのです。それを三度四度と書くのはなぜか。そこで思うのは、ここにはよほど重要なこと、大事なこと、何度書いてでも伝えておきたいこと、福音にとって本質的なことがあるのだ、と福音書の著者が受け止めていた、ということです。

今朝の聖書箇所は安息日に主イエスが病人を癒すという出来事が記されています。もうこれまでに、4章、6章、にも安息日の病気治癒という出来事は記されていましたし、この後14章にも出てくるのです。

安息日はユダヤの人々にとって最も大事な日で、この日は神を礼拝し、労働をしない、ということが律法に定められていて、それはユダヤ人にとって最も大事な戒めでありました。

ですから安息日に、それもよりによって人々の集まっている会堂で、病人を癒した（医療という労働をした）のですから、会堂長が文句を言いだしたのも当然といえば当然でした。それに対して主イエスは安息日であっても、水を飲ませるために家畜を引いていくではないか。ならば、18年の長きにわたってサタンに縛られて病で苦しんできたこの女性が安息日であっても束縛から解かれるべきではないのか、と応えたのでした。

主イエスは働いてはならない、という安息日の規定を破り、あえて安息日にそれも人々のいるところで、治療行為をなされた。それが福音書には繰り返し書き記されている。そこからある人たちは、主イエスは律法の規則よりも今そこで苦しんでいる人を助けることを優先したのだ、という理解をする人たちもいます。しかし、そうだとすれば、会堂長の言うように「働くべき日は六日あ

る。その間に来て治してもらおうがよい。安息日はいけない。」という発言も一理も二理もあるような気がするのです。助けるのはいい、しかし、一週のうち六日は働いてよい日なのだから、わざわざ安息日にする必要はなかろう。しかも、彼女は18年病気の人、つまり、今緊急の処置が必要というよりも、明日の治療でもいい人なのだから。

確かにそうなのです。なぜ、わざわざ安息日に癒しの行為をしなければならなかったのか、あえて律法違反を犯し、ユダヤの宗教者たちと敵対関係を作る必要があったのか。それを思うと、この主イエスの行動にはただ病人を癒すというだけにとどまらない、理由があるのではないか、そう思うのです。

聖書の時代、人々は重い病や、治らない病気は霊に憑りつかれているからだとして受け止めていました。病は悪霊の働きだと感じていました。同時に長い病に苦しむのは先週の聖書箇所でもあったように、本人や家族が罪を犯したからだ、という因果応報の考えにも捕らえられていました。したがってここに登場する18年もの長い間病気で苦しむこの女性は、悪霊に憑りつかれ、その悪霊の働きと自分自身の悪によって罪を犯し、罪の罰としての苦しみを今受けている人、ということになるのです。

しかし、主イエスは病気であるから罪人なのだという考えを否定されました。断固として否定されました。人が今蒙っている災難、困難、病気、障がい、それらが罪の結果だ、という捉え方を主イエスは退けました。退けたというよりも、そういう捉え方そのものが人間が作り上げた観念に過ぎず空虚なのだ、と主は語られたのです。さらに言えば律法をどれだけ守っているか、それによってどの程度の罪人であるかが決まるというような考え方にも与しませんでした。

健康であろうがなかろうが、律法をどれほど熱心に守っていようがいまいが、すべての者は神の前で一人の罪人。

それがわたしたちの根本の姿。そして人は自分の罪を自分ではどうにもできない。その罪人をイエス・キリストは担い、背負い、赦し、命を与えるのです。

とすれば、わたしたちはここで重大なことに気づくのです。

それは、安息日が神の前での休日であり、まことの憩いの日であるとするなら、罪人であるわたしたちにとって、この一人の罪人がイエス・キリストの

救いによって、罪人であってもなお赦され、活かされ、命を受けて歩むことができる、ということこそ、まことの憩いであり、これを受けずして、まことの憩いはないのです。憩いとは、わたしという人間の存在の全肯定のことです。そして、その事実を受けることこそが、安息日なのだ、ということです。

罪人であるわたしにとって、安息日というのは、もう悪いことはしません、だからこの病気を癒してください、もう罪は犯さないようにしますから、わたしから困難を遠ざけてください、と願う日ではないのです。そうではなく、どれほど罪深い者であっても、神の恵みによって全肯定される。救われて、活かされる。あなたという人は神の恵みのうちに活かされてあるのだ、その恵みの事実を信仰によって受けて憩う。それが安息日なのです。

主イエスが安息日にわざわざ会堂で病人を癒した。何度も癒された。それはユダヤの宗教的指導者たちと律法を守ることと人助けとどちらが大事かという論議するためのものではありませんでした。ましてや週日にできることを安息日にしたというようなことでもない。そうではなくて、安息日でなくてはならなかったのです。安息日に、安息日とは本当のところ何なのか、指し示す必要が主イエスの中であったのです。安息日とはどのような日なのか、安息日は何を受け取り、何において憩うものなのか、そのこと自体をあらわすものだったのです。

18年間病気で苦しんできた女性が主に癒された。それはわたしたちにとって不思議な、驚くべき奇跡です。そこで彼女が苦しめられていた悪霊に主が勝利したこと、それも驚くべきことです。事実これを見ていた群衆はこぞって主の業に驚き喜んだのです。けれど、病の癒しも悪霊の追い出しも、それに留まるものではない。主イエスのなされる救いの業のしるしです。一人の罪人が主によって受け入れられ、担われ、救われ、活かされて恵みを受けること、神によって肯定され、新しい歩みへと招かれる、救いの業のしるしなのです。

安息日に病人を癒す、なぜこのことが繰り返し福音書で語られるのか。はつきりしてきたと思います。主イエスの思いと熱情が伝わってきたと思います。主イエスの存在と行動が、安息日に与えられる神の恵みを指し示しているからです。主イエスがそこで一人の女性に対してなされたこと、それがわたしたち一人一人への神の業であり、それこそ安息日に受ける恵みそのものなのです。

だから、別の日にしてくれだとか、律法をおろそかにしているのだ、といった主に向けられた言葉は、すべての外れであり、虚しいのです。主イエスのなされたこと、それこそが安息日なのであり、神を礼拝するとは、神の恵みを受ける以外の何ものでもないのです。

四つの福音書を読むと、そこには主イエスの「安息日語録」（発言録）と呼ぶべき多くの言葉が記されています。その一つ一つをかみしめていく必要があります。主は安息日に片手の萎えた人が会堂にいるのをご覧になり、「真ん中に立ちなさい」とその人に呼びかけられた。主がそう言われたのは、その人が片隅に座っていたからでしょう。病ゆえに身を隠すようにして、隅に座っていたその人に向かって、真ん中に立ちなさいと言われたのです。それは、安息日とは、たとえどのような人であれ、神の恵みを真ん中で受け取る日だからです。真ん中とは、あなたのための救いをあなたが受けるということです。それはすべての罪人に与えられる恵みである以上誰も隅に追いやるものではないのです。

「人の子は安息日の主である」、人の子とはキリストのことであり、そのキリストこそが安息日に神の恵みを与える救い主なのだ、という宣言です。キリストは今も、わたしたちを真ん中に呼び寄せ、神の恵みの救いを与える主として御働きくださっているのです。さまざまなものに束縛され、何かに縛りつけられるようにして生きているわたしたちが、この神の恵みの救いを受けて、歩んでいくよう招かれています。